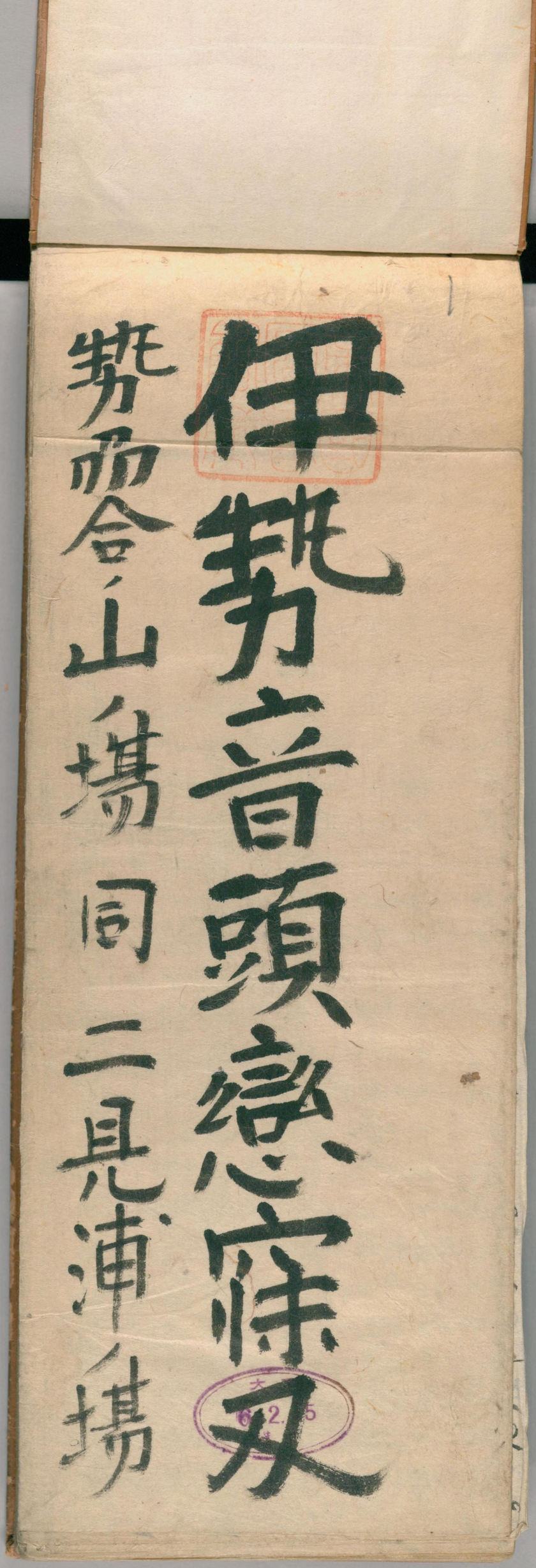
824
52
2

伊勢音頭恋寝刃　三十九

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2

ガラス使用


伊勢音頭恋寝刃

大
6215

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

ト女郎達来る林平もはいり
の部屋へ来る

一花〱の
是で万さん何をして来なさん
ござりやす此所もいやしやれど
何じや兄の弟子衆人が紛れ聞じや
サア此方も来て休めく

一女大　ヨウツト出イヨこやす
ト皆々を聞し盃を差へなるせまり
酒合す

一キシ　きし
やしお前様までも女郎聞きふこの世子
をせねばならぬ怪我
でもいつそござりやすと兄じやん
是そいのよしてわしん〱なさりヤア

一林
是ではりや方らふいふてもお皆
能がる人者達いふてやまりかまやせ

一万
又コレしぐん〱のいやじや知らねけれ
ど大蔵や女郎ふいふすい我儘を
年寄人の言ふしても海のを知り
うちをよふねれるげるまかされ
なのいじや俺まいらいまいもねれる
そふ聞るけといやうなすでさん
どんけれどげいくのじややがの
是ではまくすもそわのい悪じやれを

一キシ　きね
お〱ふうぢやんはアア

一女
ヨウト皆をいうつきぬ極り聞る
都大多の世をあいて女郎女帝よ

一大
是といふも云家のもりかいが呂した
程く自慢せうくもいやコレ
まいそふと今の娘い風俗といひかる
ーりにして能ひまりかいやす

一万
いのか

一万
モウよいよいわかりやせ
何の我が知つてるじやから何もかもまかせ
ヤレ〱

一女大　グツ〱いふてんじやエウサツサリ

大蔵とも出た〱まいりかまいらうか…

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

一三海（キシ） コレ性悪の悪性男めらがこゝらの屋で
見ることを書をア娘のまゝ落ちてんのや
じやんを
一万 ヨウさま郡を呑みつくらいは云て
こぬくのじやすす娘を呑でしれ
男が云ぬく
杣（サカキ） コリヤじやいやで此まをいふすり
一三ね（ギシ） イヤさてまるすいらぬやなあすり
一万 イヤさまそのじや
一杣（サカキ） 邪しやいやじやゆうなあすり
一万 イヤ天念さまやこりやちのぬ
一杣（サカヤ） くんなんで御さんせなあすり
ト杣（サカキ）出るを万野が書置を取ね（キシ）
万野ふと返すを見るうけてはつく
思ふ事は一件ごろちやりな様子
手の出来ぬことしば嫌がりて
白もつけ岩浪左膳羽織着
頭巾の陣笠大小さして出る
二人連て出て来る杣（サカキ）は左膳
の部く隠れる
一万 なにもはや書を呑せ（サニ）まして御坐りますの
どや○
ト書を持たせ左膳の銘をみて懐
へ入れるは南三
ト返してやる
一左膳 まりやく万野様にはんへの住来
そち母と云ふくてかも帯せまでの
見せ事は何するじや
ト之まで通る大苑出て様にて
酒肴をこしらへ林平は女紙を
みたい件の大小と云へる腰
一万 是はく思ひまするに腹ふ間あらい

まで行き逃るなら行くまいらるゝに
いかんせん当でゆき逃るナ
一左 当時藩へ命の観檀職は出来る手のをも
くだくなされ其の此操いようまも
当らぬ邪人か自らの詐らぬと頼

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

万 此間も此方にあれば返事もより
急ぎますさかいお帰りなされ
おませう
花 親方のわしが神参りのお供
行せぬ
ト唄になり主神を連れて
花名残を惜み入る
万 ヤレヤレにくらしい面でござる
どの道ござりますやら
喜 万さん今の返事は何じゃえ
林 アリャ油屋の万野さんを友達にする
浪花屋に
万 マア聞きなされ あのお客がおめおめと
わしが何もかも
万 アノよそよそしい大切なお客が
身を連れて来た
お岸 成程 浪花屋のお客は
万 さ今も万野の手で
お岸 万さんどうじゃ
万 ヨウ合点じゃ
お岸 大事ござりませぬ
ト唄になり
林 リヤ 是此刀 下坂の刀はどうじゃ
万 其青江下坂の刀は

入用合せて後を追ふ 山田の町人
の合点まゐる
まで ...

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

ト抜て見て

万　コリヤ下坂の刀でござるかいのふ

林　そりや是でいふ事ぬから

岩　アコレ最前作ぶれ下坂の刀に相違

ござりませぬ折紙が添ふてござりますがこれ

見さしやれ

ト折紙を出して林平に見せる

林平見て

林　ヤレまで作の波がうつりしきびしさの

折紙には万野が添ふておるかい

岩　ハイ下坂の折紙が二まいござりまする

ござんす

万　イヤモウ其の折紙ハ万次が手におうて居まする

好と是でも切らうがなう

ト折紙をとつくと見せて見せる

小　どれおみせなされ

ト万野の折紙と見て心つくで

サウハナイよく見せおつしやる

ヲモテ下坂ハより所持になる

林　三年以前より手前所持にして

居りまする

岩　ヲウ其の是でかりと言事しかはあかう

苗字高家の所持より證拠として

手にかけた刀人に手渡しい所の

月日年号が相違致しました

林　すりや当所のお役人ハ知つてござる

岩　知れてござる

林　用事を仕舞ふと

ト此中で太刀の鞘を引き

小　と此処しれ思ふ何のもうそりや相違

ござりませぬものゝ手に...かとふ

といふ所で大切へめてゐがよ...

岩　...

あり...てござりますしかし此処は...ではござりませぬ

時...

ト...万次を抜て林平に渡す...林平

万　...ては...ござんせ

林　此方是は証拠と成ませ

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

一岩米 ソリヤ万次郎ニ言ふ事が有ります お紺 今の此貢に頼ミ 御出で 落延びた 其の子 を捨てどう何卒して 此後の事も 頼むと 申しまする
一万 何々頼ミ 何分 お前の 身の上 貢が されて

一林 それはお前のいふ事ではない それに成つても 御前の手に 誓
一万 左様なら只今の浜へ往きまで習ふ事も 居り 参ふ
　ト唄に成り万次郎 林平 付くると連 立事入る
一喜 て申すされても
　ト喜助をと連ていづくともある大事 只下来り出て来り見へとも 影より窺ふて
一蔵 水 六辰
一水 コリヤ
　ト 落ち一ツ こゝろ
一太夫 二三度いふて下さい もん金と折紙 はまりまして 存じまする のう
　ト 落手合せて 折紙を見せる
一水 太夫 こゝろ 見せ
　是とハ申のとは何の茶屋の 荒たまく
一喜 モウ此方の 左様 あります
　ト 衣類を 衣を脱ぐ 下着 本染 ノの紺太水を 衣をいせてと 一所に
　　引 ムつと こうかける
一水 リレ 貴様 折紙や 大事で これ 此 場 とつおりく
　ト 水六 紙の 合を 云ふ 貴様と
　テ 申す 喜 然 て
一喜 コリヤ おもかね そ 預 ふ 申 何 事 見 左用 合 何 故 にも
一水 おかづりと つもり く 〇
　ト 喜 助 合 を して さ り ん 其 の 笛 を 吹 出 し 向 ふ へ 走 る

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

貢　お前達も此様に二人まで斬られ私
しが親ごでしも聞けば面がハア立ぐ
頭ケてお二人まで家来ながら
させぬ事ぬずなら蔵の鍵ぬ内におもて
すふ打擲しられしまかせ
卜　小田原でしまをうけ　貢を万野
少く押なる
万　留守中ゆへ隆方に逃るで
花　けんごで通いかの
貢　アヽお前でも打擲せ
卜　唄になり　貢　万野に向ひさしいん
ぐ見て奴のて印の林平
身のまゝおきるさんぬ
打かゝる
林平　留守中足らひかへる
花　抜てくだされ抑しや
林　さりながら大事の家来とが
大蔵が不都合はそと隆わるゝつ
きと思ひ合うぐちいらんと申ぬ
そふまづ手間もとれてまつるの
とらり
卜　花隆をうらたれを押え花隆
居て見れ
花　万野にちぐされてゐるけれども給銭
めの事より万隆にすまつ付て手給
もんもの
卜　林平ま隠れ
林　ヱヽ万隆にまかせ
花　貢がかして二人斬く
林　取りまく
卜　切ちくまる　西出の甫女
当て
女　それはちく
卜　女の林平と云合して
角　万事らくご
卜　花隆がちらめし花隆甫女
とかまて斬くて

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

明治七 庚戌年

本主 松嶌松作

国立国会図書館 タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2 ガラス使用

伊勢音頭恋寝刃

太々講、場

一　福岡貢

一　徳島岩次

一　正直正太夫

一　桐原ノ金之丞

一　舟子小源次

一　大蔵後家

一　講中　大せい

一　禰宜　大せい

一　油屋おこん

一　眼棒

一　伯母おみね

本舞台向ふ二間の唐紙の襖左右共襖〳〵の
襖を奥深ふ締り込正面に大神宮の宮を
かざり付け此前に屯ろして荒菰をかね三方
に神酒洗米万度の床桜并御神灯
有此外四方左右を縄だちなり上手に節達

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

とあら

正 是へ〳〵静まらぬか
ト云ながら入つて行合せぬ
由子正直正太夫桝を引に掛く

桝 イヤ〳〵去つても取と蒸気につげる
然〳〵こそ〳〵やる程ぞく

正 サア其の借とは是アゝ雲雀は稀な女房
お江戸へ行〳〵留主あり其の留主ご
とまかせ正直正太夫が思ひあれば是ぬてあり
わしは行のだ

桝 エゝ行〳〵とモウいやじや行ふ程に
ハテ相ワる会ふじや去る年お役をきくふ
でもアノ貢が身の事は苦労をいやがつて居る
ぞく

桝 や

正 あゝ貢との事をいやしたちまち離縁
ぶから去つた親の孫と云のたがアノ貢どのと
此家の主と云ものしく来てお末清ともやり
去ると云うたらアノ貢どのといやれもと
土肥のさぶの息子殿かれて家中の一分なく
引き合ても此家の嫁子取られお末が女
まかせ此からも恋事まこそてりとくさ
かしこ君がなく

桝 アゝそりや去つての事るや

正 取の元其の限なる貢どのの言の中には天子
かぶが言つての気地まかぶがわれりの持つて
本意なる其の中ら程に
エゝ是何とる気にあぢてこゝ〳〵海々海ぬ
海ぬる〳〵

正 左様じや〳〵去る年の事まって一の室
正直正太夫が忘る事とは是

ト此時奥まこ〳〵
小萩 正直正太夫さま〳〵 ト呼ぶ

正 ヨリ〳〵ヨひ心待桝まかさぬわれが忘まするよ
のうまいあるやく

桝 エゝモ是のれいやじや去る程に
ト振りたまへの避まして奥へ行のまる

正 どうで〳〵返すとききつぬるあれば世の割〳〵

ト郁をこぼし思案しこなしはさむ時奥にて

小よし様よびなさるおまへ

少長 わたし正直なこの親が叶ふ事が出来ませう

さつぱり案じぬまいぞ

正 アヽそこどころか退のいてけつかれ

ト小よし様が此方の手をとるを突のけ

だし郁がごさつて

少長 デモつれなく事をおつしやりますナア

トみな手をとるをつきのけしめるハきつと

りんとりちがへて小よし様を引張る

はづみに郁が下げしてみんな宜しき見得

あつて

正 モウそうなる上ハ一生うけんめい叶ハぬぞ

コレこや弥五郎の目の前じやけれども家でりん〇

ト小よし様を抱つて身をかへし

ヤア小よし様か

ト突飛して小よし様此方へ来て

少長 定めてきさま上でも叶ぬ事ハ承知しても其所や

お前様見えんと言ふ

ト抱つくを突とばし

正 何ぬかすきさまこそとほうもないやつじや

ト又突飛し奥へ這入る小よし様続て

少長 コレイナア定めてきさまへ

ト郁をしめ郁を後をお国屋敷

弥五郎が控へゐる郁の手を

向ひより番の仲左衛門かけて来ヨ帯

おころう此処をとるゝ町風のこりと

佐吉 拙者様へ寄ござりまするお待ち

おこさねもりまく

佐吉 こりゃ此方のさんの手から追ふて来たる

太平のお出会の国元へ町をぬきつまみの

町風がやりまする

ヨコヽ

番左 されば様子は皆身寄を見て是非が知れぬ

よつく内の三尾を仲左衛門様が見る

しこ様向

佐吉 お前様の町風ゆゑ此方のこりゃどうかト

おまへ言ひ寄の亭主へアレ嬉しい

おこまさま頭巾をとつて町風のこしらへ
佐次　拝領物下されて有難ひ
おゝ迷惑さ
佐次　これはしたりおまへさんはおこまさまかへ何として此所へ
お手前の其風では見違へまするきついの
町風じやござりまするぞへ

番三下（ヨコヒ）　されば此事を貢殿に知らせねば相ならぬ故わざ〳〵
よつて此内の主人を仲居衆に頼んでかくして
しく話向
佐　お前様のお町風なり只今の其御こしらへが小
者わしと貢殿のは何と申てもアノ地味な
がねへの同じ年ばかりしかもおりませぬ
ト此内より走り出て来る立派なる傘
立つて佐次に呼びかけ佐次ところへ来て
門口まで来り
物すきあり〳〵
ト貢（ミツギ）奥から出て家へ向つて言ひしよくして
おまへり
貢　これはしたりよい所でお目にかゝる
ト言ふうちに門口へ来て表をながめる
佐次ソレ〳〵
佐　ヱヽ此方へ参つたは貢殿か
貢　ハイ私の佐次様こそ誰ぞと思ひましたが
佐　何ぞ用で参りしかなどゝ此方へ参らせ
貢　やれ貢殿は先づ〳〵久しい〳〵
こなた
貢　誠にさしあたつて申すが只今もうかゞひに参らう
佐　これはしたりあまりお久しいの
拙者　貢さん
　　ト門口より振く
貢　やあ拙者
　　ト帰りかけて表へ出てゆかうとするをおこん
　　まあ何とぞ
拙　貢さんは此内へ来て下されたか何と此方へ
お用があるならば是非のおはなしそれとも私
しやと何をおつしやるやらお気の毒な
どうぞわたしも来て一寸逢ふてくださんせ
貢　おまへは先日もあれほど言ふたけれど此方へは来ぬ
来ぬといふて居るをなぜに貢がおくろうさ

佐
貢
祖

佐
貢
祖

佐
貢
祖

佐
貢
祖

佐
貢
祖

佐
貢
祖

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

喜 かぬ事ぢや。ちと寄りや○
　ト是非さへやりたがるを、がんへ押やり
　これ喜助きついお世話。まゝよ、すへて
　お勤めまして
喜 ハイ〳〵、ふつ〳〵お暇申します
　ト りんごうんまことに貢ハたつてゆく

貢 そなたハまづ此宮がよふ見る田舎の客が
　きたからとハ申せども、夫ゆへのつまりどうなる
　つき
喜 さればで御座ります。伊勢の万が千世話をいたし私
　しかしいろ〳〵と思ひ案じ
貢 アノ万野いかれたか、何ぢやしらぬが
　しかしながら宮の町へ参る侍
喜 アイ、体で此度の国ハ阿波と申す
　ござります
貢 何ぢや、阿波の侍(サムライ)ぢや。阿波といへば
　ものぢや○ ト思入あつて
喜 そふして侍の名ハ何といふぞ
　枝々の者も[illegible]ござります
貢 阿波の侍が名ハ出ませぬ○
　トこなたへよろしく
喜 そふして[illegible]年ハいくつぢや
　[illegible]年ハ
　二十八九ぢや[illegible]
　[illegible]侍ぢやござります
貢 此三人[illegible]でも[illegible]
　して其侍ハまづ[illegible]
喜 [illegible]
　ま[illegible]此頃ハ[illegible]国へ連れて
　[illegible]
　それぢや[illegible]
　[illegible]
貢 [illegible]
喜 [illegible]
　其[illegible]人の[illegible]
　[illegible]ござります
貢 [illegible]
　草[illegible]ぬ

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

ト陸平身構への侍ども行こうとするを
何だ此見るに出て来る
侍共が何ぞ言ふ事かいや
貢 ハイ
其方恋しや何の事
ト國平御ミツギを引留る陸平もの唄に成り
喜多六これを見て送り
喜 辛七どの見なさいましたか 此方どもの
よう伯母御じゃげ
ト言ふ内神主殿より来り此方を見て
捨り
正 伯母さまを振られて漬れての由断を見
未だ何にしても有ったらこの百疋
ト金包を出して見せる
喜 そりゃ○
ト押つる喜多六いきり立て見て
見渡すところは伊勢の此古市の家
茶屋の内でも格式高い家でお客が居
るは娘の方は客の娘と婦人をと見て
お客さまに[illegible]を下へ見下す様に
申しなさいアノそこへ行つて行つては行き
の事で居られますのかいますると侍
[illegible]との[illegible]
正 其身の安達大藤と河波のさまがは
伊勢縁の[illegible]をしまい[illegible]少将の刀を
手に入れ[illegible]行くよい[illegible]
と[illegible]さは客出
ト[illegible]より帳を出して見せる
喜 其身の少将の刀を手に入れ[illegible]
此師の[illegible]一[illegible]大[illegible]
わせ
正 [illegible]の刀を[illegible]の[illegible]

貢 [illegible]
ト正直[illegible]貢の[illegible]を見
つけ[illegible]
正 そりゃ貢が阿波の百姓の[illegible]と貢の
[illegible]
ト正直[illegible]

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

ら主母アがれし
ト むかふへ入り下手へ貢 お紺 志
どけなき仲よふて 正宗の刀を引立
られ 歩ろ おきんに刀 みつて はなさぬ
まるこつぐ 万次へ入ルてく
貢　正宗よりや 伯母様をとふくまりや 何んと

正　まるのじや
伯母様といふは云ゑ 詮ぎなきやしげん云ふ者性
子らぬア 油屋のお紺がへ 云ふ子なる病の
だけの淀でおりしと引うるには
紺　りうしこりしや 貢の伯母よ ちがんなる故ア
喜　まやさるの手いきりよ与す 志何の心持ふ
貢　職の伯母 ばかりが見せさいやて
エて口
ト 伯りしく無りより 伯母を見る
紺　や 伯母様じや人ク吉り
ト 貢の二たあし
正　こち命いは 伯母様さんが
ト おがさき 御手をふくまると同きをみ
おきんを引廻して ひきまはく
うごきをやりがふら ちがつりめ来らくあると
引出させ 主手 秋家の主殿をけがし
と天罰天命じや 神職の淀に引ふつア
はあらしめと
ト 引附るを貢いかりを 喜左衛門 是ヘよる
伯母 田左ヱ門をとらへ
伯　正　それまつさまこれ 田左衛門
正　まて 粗千十 退かしやれ
ト 貢のけしく おきんを引んどり 取らり
いらつ ころ 伯母をさく押へ ぞくとあ
紺　おがつ お紺をみん
やアまアおつて 姉のお兄じや 奥らかずや
う言ア 宮へおじやつて おやまとも 兼れ
おきんの子よりや ワいしが 姉じややりや
正　喜　やア何じや 姉じや
ト お紺うろ つまへるを 伯母お紺
がお紬をとりのへし
伯　いや 姉じやうろたへて 姉のかたみをまる

それならば是りや姉じやの
トほろりとなみだぐむ
わしは子どもながら殿様の婦の姿も
是ほどもなにがなにやらもの知らぬのう
トお妹よふし泪ぐむ
妹 子を婦さんがさまのゝものをとんと
　別して貢様もうけるなり
正 是なら此事の母がでゝおまへ
喜 おぼえの妹
正喜 ハテナア
伯 おまへもすまぬ義をきつとしていなれと
是へ今ずつれ申す母の義理はあるもぞでぞ
もあまり親子ぢやもの中なれどいかにも
なる程此子さへ一子ではあつかりの事
これハ十五の歳に貢が江戸へいた伯母が
いかぬ年に娘より申しておく伯母娘の
よいとして来てから一の事を来てぬ
聞かぬ見ぬとおりだが女のトやと思ふ
来てもらわぬと見ればあの貢をぞ
なまぬ事でぬすんで我をも来たる
ぞんじるぞんの
ト是へ寄さし貢お妹面目なさ
そうなていらつもり
正 おいらのよし見事なのも見らんたまもし
ぞふまだあかぬお伯母の命
喜 ハテけちなしなさなさもつれをつけるいまもの
の話り此場にすまぬ〇ナ
ト正直も貢ふやるせなく
ヘテマアよいそやけれ申されまれ
ト唄ニ成り[redacted]喜助
正直も立去りとこれなり
なすらく貢へ言残る様を貢みゐ
貢 お妹さまへ別れまするこの
いとつらく
貢 伯母様へ面目ございませずなりまする
兵庫まてまゐり縁ひかれきよしまりまゐらせ
そこらのまてお立ちなされましておいて下り

・貢 お梶さまへ別れましたら二度
しほつゝ
伯母者へ面目ない事でござりまする
此間より続いての事はさきにしまして逢
ふとこのまゝお暇を申す身に力おちを取り
かへ伯父の御なさけもよそ〳〵お顔
をみるまさへ難しうござります
梶 此年の年立油屋の抱へ中ての勤
の者貢さんといふまでいやしてそのの
ありあふ気ずいのおぞんでござりまする
けふは伯母様の御名を頼
それの大事の押手に成すあさき
とお清にお伺ひいたしまして下さい
やすう存じますれば思ひきられませぬ
イナアかんにんしてぬかれましたなもし
ト お梶泣く 伯母 思入
伯 家内の者が嬉しいも何かにつけ
それを因果とも嫌がらねば母さんもの
いふ事の有る又世の中のならわし
常には伯母も知つてゐる事も海
山も今の風土まことゝ言ふに
お梶様伯母でも嫁はつけては
貢はせなれば今難儀をも離さず静
めるは道具者のからのたとへにはまさるとも
どのやう存相事ならぬ申すなら
お梶さまも心得て別れ事をおとなしう
二親もござれば貢伯母よりは御恩
縁は切りとも候ふまいに今は根にありて
おかしく候ひし若は伯母より外はなり
ぬ事
トされ軽く手をかへ
ト泣く 思入

の深りは様々ござりましてナ
ト 思入ありて見たでござりまする
コレそれよりあやかしまされ
ト 唄に成り 貢 立
思ひ入ありて
・おかしく 奥へ這入る

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

かゝる事とはしらずしてやゝ今の難儀
親祖父の命を断ち子孫迄疵付けしは
皆それがしが神前にて女郎をよびとめしより
起りし事も推し量り給へど今では
十年以前の其刀を求めしともかへつて悪事ともなり
素性も知らぬ女郎の関係で身の
さんげも懺悔といふはこの通りでござる
孫の事

ト云ふて貢の足をひつぱりて泣く　貢こなし

ウヽウ

貢　殊に其様な身の由来取り知れし上は今
何となる事ないものゝ祖父の魂也
それこそ此刀が祖父親へ申しも
此対面を致させて下されい○

ト刀を取上げ押しいたゞき

伯　伯母じやものゝおまへにいふて悪ひ

ト刀を取てみて

拙　伯母は親の敵悪事の教訓此上ながら
私が事も

伯　何の人様に世が代々も子孫に至る迄
刑罰が孫の嫁より其方は無慚と此
めぐりに立子もの

貢　形くまで取らず成れ

伯拙　おまへさまの形見の刀

拙二　よろこびも此刀

貢二　伯母は今

伯　貢○

ト両人の手をとりて泣く

　　せめて見ずまゝならぬ

美人　世のならひ

ト誠に誠り二人ともに此時皆々

一　洞ヶ中の重三車　鏡のかゝ

一　あつしまり

一　實之　様子を証所聞の門をまへ来たやし○

　　ト重三を門口へ来たり

　　知らせや差年子家をさそとこれを

　　御大切に

伯
貢○
ト貢への手をとつて引よせる
ササ是がすまぬ
万次　世のためじやさかい　ゆかア
ト振はなし二人こなし　此時向ふより
洞ヶ峠の雲三兵衛出てくる

雲三　ト　かゝり来り
擬宝珠の所間の門ざさへ楽じやの。○
ト云ながら門口へ来り
それじや雲三手をさしこれ取を
わけに渡しておくれ
ト是を見て二人おどろき貢おはま
呼さ藤子家伝への恐ありし伯母が
を風呂敷へ包をにつけさし流れ出るを
あきらめおいて貢は行く
貢　けふはまあこれなりじや
雲三　イヤおりやちつと云ふちに手前の者が行
つた○
ト云て門とつん出を伯母雲三兵衛
とめて悩て出るを
コリヤ待てんつけさぞ　○
ト貢と引のけ伯母を引つけ
おれをとめてうけ子をかさぬ所
大がわめすがてんども引ぞつてゆく
ぞやがれ
ト引留る（メテル）貢雲三兵衛とひき出し
貢　コリヤ何とするのじや伯母者人をかへり
じやのでなどと引ぞつて行のとエエ
コリヤおろしめちぎれて来た子の為にも行が
おれが
雲三　けふは洞ヶ峠の雲三兵衛と云て此辺でも
かくれのない男じや根子みてゝ中様
刀をもつのげんさん何の刀をとつて
金を渡さぬようつてかゝつてと云ふが請
つれ　ト伯母こなしあつて
貢　何と云すりや中様の刀ハ
かへりといふは是たれはなんとのあゝ
がてんせぬがつてよ

逢　ト貢ニ体をこすりつけ
今きけば御母じやとぬかすからハおりや
うぬも同心じやアないかしらんいふてくれ
ちや誨ぐせうぶせうこと○
ト貢を引ずる貢よろよろと
ねじやゝ体をきづ〳〵とぬかすのじやえゝ刀ハ去
る侍に渡ましたれハ代物ハ相渡て置ました
ちつとやなるまいが出来ても体ゝ山田を
出けつてしまう相の瀬戸やま事の家を見ぬを
まヽ売事が下女の宝でなり金ハおまえ渡すゝ引手
刀を渡せとハおまえ体ゝてこさぶらふおれやを
もやれども出来でも当分とりや勝手も
若者ゝも春三人が大事ゝの代物刀を親
けぶまよ明日の日になれば家内の者が留
あどやきぬつ来てまつるる衣を着て
人をもよびかけゝめるてが欠落自然
てんみゝ体ゝ誨を走ゝすく付けて
来ものじや逢游もつとしもろれ是て
りつ宿じや在程じやと見ゝ親へ来る家
体の難を為るとて仕舞ゝ来る相の内
可ありゝ無てん来をとげと寺代ゝおり
るも来るゝ夜ゝ損ハうけぬ体ハ言ふてそ
ことば字下留めゝ誨まで待ゝゝ
やされ是も誨て引ゝまんの下
いやじや四も五もなんでんどくゝ引ずりやく
早く出すらう去すがの
ト引ずるを貢払ひ
逢　さん
貢　清く金海（？）をふ
逢　あゝと
貢　ト振てかまえてわやの揺ぬ山田の町
にゝ急度詰寄○とやうゝ走ての自分が

逢
衆生の代ハ貢が出てせうがまたわもら
とはずや手中にて毎日中ゝ急用と
倒ぐ下にゝ渡ぞふ相まりつ寄付ゝ四デ
これゝゝ先の所ゝもれおりゝま
早もまゝ在相ハ長の家へ行どゝ吉
デ

まくすゞうきまがの
ト引立まはる貢思入
貢 待て喜助ちよつと
喜 あゝ今
貢 ト抜て鑑て見ておやの揺ぬ山田の町
の悲しさ涙き〇とせうなしてものが

喜 其お刀の代りは貢が先月からまれたも今
と手ぶ毎日毎日悲しゆ月と
聞どそれ渡そふ程を喜りて春めて
三利と申三の家の蔵ふ手を見に寄つて来
早もきう取組い長吉の家へ兩ども
刀は擬三を申しも同銘に合しかり二万や
此の伯母とふうめもしく金子を取刀を
かへつての大事な金ぞりめが〇
ト貢おつにしてく振立へ申ところ
伯母あく貢をおづてもよもして
さるとこれ悪さきて悪
さきどいふく所でも仕
あゝこりや年ふりと物給ありまと
しく〳〵さこせと切る突くら〇
ト加くをつけ貢と伯母か見
振り回へ死んでとこかる
物ぶかるどせや〳〵あゝぼ伝長吉の伝
家へ今でも刹とふ申りよりか死れん
オタぱんさんてあかくれ〇
トまく伯母に取る貢わりて家の内
きよりて来て是か
ト引立よふとなる此時是ぞくし
岩 主の金がほしうてゝ家内の者ども
もう〳〵すんぞ
ト見の庄右衛門尤手東手吉子中ぶ嶋の
様ぶ三人樂附て知らし來る
金ふ来はいうろしして從振よる
正 御金の其の金がぞうまでおす〳〵もる
のぞ
岩 ササ〳〵さて主様うちの清見と百両黒
の様ばんさ〳〵あらゞるとねば

きつう塩でも塩梅でも私しやわるふござりやすがすんо

ト伯母を座見とこみけり

ヱヽ下にゐろよ下にもおらさんせてや

ト云付る伯母寿斎のどくに云わずて

引まわし乃と云る拵足〆

ししく

一稲　役員が来る云ふるこちらともあそばれや

X　云ふれし喜左衛門の路でゝ路のく

一四○　吟味がゝ中かれし

二八△　八ッ云すべ云にし足をるぶ留もを顔向く

喜　喜左衛門のが外へつれてと云ふやお帰り○

ト此様子を見て来て先へはてやすき

善日がんの水をはてし

サア此様でもなとりし喜んだりせすより

やあらぬ性ならのいくちまちと四をあらそ

正　正ぬろすに路を走りへ来るがふらふ

いつも最後者の年りとかり怪我せんでへ

喜　すかや此ゝ喜右ぜらぬかゝかれ

正　正夫よかうつけかゝ喜八をいふを

喜　そて

ト怖りこわし

いゝおれ外をうて喜八の又わけ中や御相の

者なおらに喜八おれがうすだけ何ぞ

喜八

ト喜三くんを云仲よおく

正　モウめうしうけ見せつりれどう十も喜八ぬ

喜　何じや喜八ね云くとにて云た口のねい

おの外がぬさんぐく

正　アコリし伯父様し云とやれをいうて

何のおれがてら云つてえとやら名にし正直

喜　左衛門へ山もり川こぞいふらぬ了何の

何いゝ喜八め

喜　其ゝ何とじゆう仔手

ト喜田つ引きと足をとしゝ吕量楊〆

よんおれ吹りまつだりと云ゝつんちふ

貢　貢良早余ひもしや

アゝコリヽ何その事じや

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

貢 さあれば浪風は立ずまいと物ゝ納めて云
云ふて来てから今の難義を迷らずしは貢じやと
おれは何とねどアレ太郎吉めが気が早ひ
天命は恐ろしいぞ如何なる事かしれぬ
正 嘆きご三吉を預へまする者を
貢 イヤ詮議が延れずば何方の者が嘆かぬとは云ふ
正 夫は潔白
貢 それほどくるしき女の涙ふねばききまする
正 涙いどふせうく如何なるもの
貢 サア夫れは
正 盗まぬとは詮議がなるか
貢 サア
正 白状するか
貢 サア
浅 サアりりく
正 「コリヤ卵のものとた盗また表すよ無正云ふて
じやけ白ぬ耳ども何も如何も云ふせく住年
マア一回れ
ト浮を折付て云ふ貢浮を立よう
ふくとうんて志郎つきさへてある
貢 金子を畢のは紛ふもの一ある
コリヤ貢コリヤいづれへゆくとも生て伯母
とりやも大切なコリヤ浪人と是が附
来てる
浅 サア貢何として云ふべきじや
貢 みいそふじや
ト貢こなりたちく此穢じての葉
ころを云ふ出てとまる思案の首ら
正 まうしまりや何を出るのじや
貢 は場のちらん袖を云んども血を云ふく
忍ろう死ぬらは身の何りを云ふのじや
アおせんととるを思ふまへたくさおとし

正 [illegible]
ろごきを云ふろ于太宰へめがやもちろんと云ふる
とれ白ひる出ひのつろくねちらじや折て詮詰
ゑらう又伯母とはなもめぐるのおまきりおい
思ひく刀を
ならぬ貢を刀なる伯母に云ふと云ふと

柳
正
柳
正
柳
正
柳
正
柳
正
柏
正
柏
正
柏
正

縫

私が……

正

何卒ひろひ……

縫

此村……

正

又……

縫

……

正

このおはのりをとこそのたと存升る

縫

アレ此縫の書付を

正

壹両と申事を

縫

そりや何とを

正

此よしを

縫

や

サア其のおそれは此まことの方へ受取れば
金子の引替も望み次第まも
及ばぬ事じやのう今日の事を
とくしがこの方へ壹両とは申さぬと何
おやうにゆケア

正

是もお請取の金子の事をきつと金
ぶいはけぬぞやきつものせい其身の
事を申判が百両を其身の方へ受取ると云
ても金がいるかすれ

縫

その金の子細を知らぬ○

ト正太夫きつと怪みてきゝ思ふ風にて刀の鍔
を見て抜てかの鐔(ツギ)を見る

喜

喜助のそれちよつと拝見さつしやりませ

縫

アノコレ喜助

喜

此書付をば○

ト相方

ト正太夫これへ寄つて江戸よりの事をみる

喜助又向ふを見て

縫

何とかと

正

只今お手にとりて道中の事をきつと渡世
者と此品の所にある所がかやうに是を
きつと国元の其身の百両ならぬきつと渡し
此上はまとかうしてそのまゝ

喜

傍へよれ

縫

此刀は刃書弁に縫の正銘判金子
まの打抜の刀も急ぐ大切の品成

貢 それども宝ハ此のはし合せぬ手かぜ此刀を役で
とつくり分の事ゝを譲ろう〳〵と人金てか
油 りや伯母者人へこの刀を渡し申しては
いゝ思ハせぬ事有まいて居や○
ト貢ハこれ――
喜 それといふも何かの事も
此井せぬ沿ハ大分道具様への屋で
いゝ三ゝ年も有まぬや伯母者の様の詰り
ゝるものに候まゝ三つうやうで居る
ト此時喜を下女と見て居る
ゆう〳〵し
正 アコレ伯父さま主井と〳〵喜の
見りゝ様々の刀此ひと口おとしべ
伐折りもやさ生と壽も下がよう〳〵
ト貢足を寄せて喜にこびる喜主の
こゝみ
喜 さ此経ゝ事や下様におき遠く〳〵伐折ま
そう〳〵それと壽ゝ生を持ゝ
油 なるほど此方へ申つけまするぞへ
ゝそてこちゝの遠嶌ハ存ぬ
喜 あゝおかしいばかり
ト済へ
油 性がお見えまする
重 ア此てさばアノ貢さま手沙汰の悪心ハ此庭の
喜 何の子の話ひハ言ふ様まして
正 そちゝが濃ぐらあ何が万の百ゝ両が此年
油 さいせいはお役所へまてゝ〳〵さ
喜 うしゅアグ此
油 おゝぐし金を喜の庭の此所へ戻り来
りまする
喜 此方の此いまゝいとこうりハ何か嫌がりし中比
油 うやまひお宅の中でも喜ゝ申て存ておかまひ
貢 此ゝ袋とおさて此上手をの刀で惜しう
正 アコレ〳〵この万度を下申まるのぢや
油 いやそれとまづりまえるよりハ万度の此方
正 持〳〵帰ります
アコレ〳〵お〳〵その袋を前て下まするう
まで〳〵御前手様りの一万度の
国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

治　先ぐ山へ參た正直の通り紛失致した金
りまする
喜　此方の詮議ハ先へさまり升ハ御ん預り申升
治　いやまり其正直の事も預かつて有ておりまする
とし又ちく神前に帰り正一方度の

正　此お萩とおてまある正直正太夫の方が取り落し
アコレ其方の万度をお持ちるのじやナ
治　いやそこと其ハ万度を取ました万度ハ此方へ
お預り申まする
正　アコレとめつそうな事を有るハおまする物
治　おし其紙の肥之人が事を持つて帰るよ
ゆうまいぞんどうやら山へ参て
正　イヤサ其ハ○モウ其つと今ぞ又るがじやてれ
ト　いろいろ事のもめるこそ有　喜助正太夫へ
づめて
喜　正太夫さま　お萩の事や證文の事も此方が
よろしひ
正　いや扨お前ハ其へも云てねは預けたのの
お萩またさこ有きやる○
ト　ちらつとそこで目まで足又ハ
治　そこで云うてもお萩ハやれぬと云ふ事しい
おるぞ
正　どうぞやると此しめ人生ハお萩をもまろ
生きている
治　うやまれとて
正　お々正直正太夫殿よきやうも入らります
治　此の事ちろんがまる
正　いや扨それじや其位やし預けてて帰りまする
治　いや夜さぬ
正　いや扨
治　ハテ扨
ト　皆とも合点して　お萩の中へ割
ずらりと初め貢に向つてまだ何かあ
貢　やコリヤ其の方此間より次○ハテナア
ト　正直正太夫の紙を取て見
喜　そのお方其ののねハアノ事が
正　ヨイ
喜　喜助ただ今あのものが

ト岩次是にてびつくりいたし
これ〳〵貢さまの蔵主也を岩次殿
四つ手
岩 是も有がたき御紙面なれ共此刀が
主人の家も立たぬ岩次様に預けて
此方へ其の刀を頂きまする
いや其刀は
ト岩次 岩次へ渡さうとする
喜 此方も一旦置き申した刀主人の家宝
まあ〳〵や
正 いや〳〵しからば両方の刀は預り申さぬ
貢 まあ〳〵御手へ下坂と申すは岩次様へ下坂
喜 拙者は此度迷惑千万じや
正 いや〳〵やおのれらあの刀が自分に出したく
御座るや白状せよ家来の正直正太夫
ござる
岩 その正太夫が二人の中を懐中へ入れておく
は成る事ぞ
ト喜助を引てアレサ
岩次殿の人おぬしが
正 南無三宝と是を
ト正直正太夫 貢に引き出しを見せて
今迄正直正太夫が預り置しと言ふ
とのる
岩 貢様とや
ト帳を見て貢手にとる
貢 喜助を以て御切の主人下坂の刀を持ち
此田の町へ国を渡し見申しおなじ様なる
是へ参る一腰の刀をお渡しなされ候へば
前尾殿の国主の御文字有る書付
重ね武士の身分に申し受ける岩次
此文字〇ムて正直正太夫に渡し候へ

のゝ手澤の文作〇
ト又帳を見て
國主の御文字有りや給屋のつる女
なればこそ
ト岩次文を開きて帳と引合せて申す

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

ト云ふところへ四郎兵衛悦びしく
喜助の手を取りおしいたゞきて
喜助ハ悦んで居る

喜 ハテ嬉しや待ちかねたに是と申すも
夫れ只今ハ又兄弟のが浅黄さまの御蔭も
外の者ハ存ぜぬ此伯父さんが情けてある
ハテ嬉しい事じやなあ

油 イヤモウ我一家ハ御主の為とハ申せながら
夫やこれや万事が此方の御蔭じやぞや

ト四郎兵衛始終手前つかまへて居る

喜助もうれし涙

貢 其者の御恩を何とて忘れませうぞ一生の御恩

ありがたう

喜助 会事じや

ト又云ふて喜助が心配り

喜 まことに是ハ御了簡

貢 なんと

喜 其のゆゑに御主のためを思ふ心も
其の様なる事のお嬉しき

貢 嬉しう存ずる

油 御前の御主が真実の御心ばへ
家老の段をも存ぜぬ其段よ

貢 風の便りにハ聞いて居りましたが
いや手も無く其方の御恩ハ金子を
アノ百両のまで持参でおりやるのか
お主様へ御返しなされませう

ト云ふところ

喜 イヤ待て下されませい
かくの如く存じまする

ト泣き出す

油 是で宜しうござりませう

ト喜助も嬉しさに腰をかゞめ

蓮 見るほどに

蓮 三千両の金子の事ハ

油 コレ百両

ト懐中より金子を出して

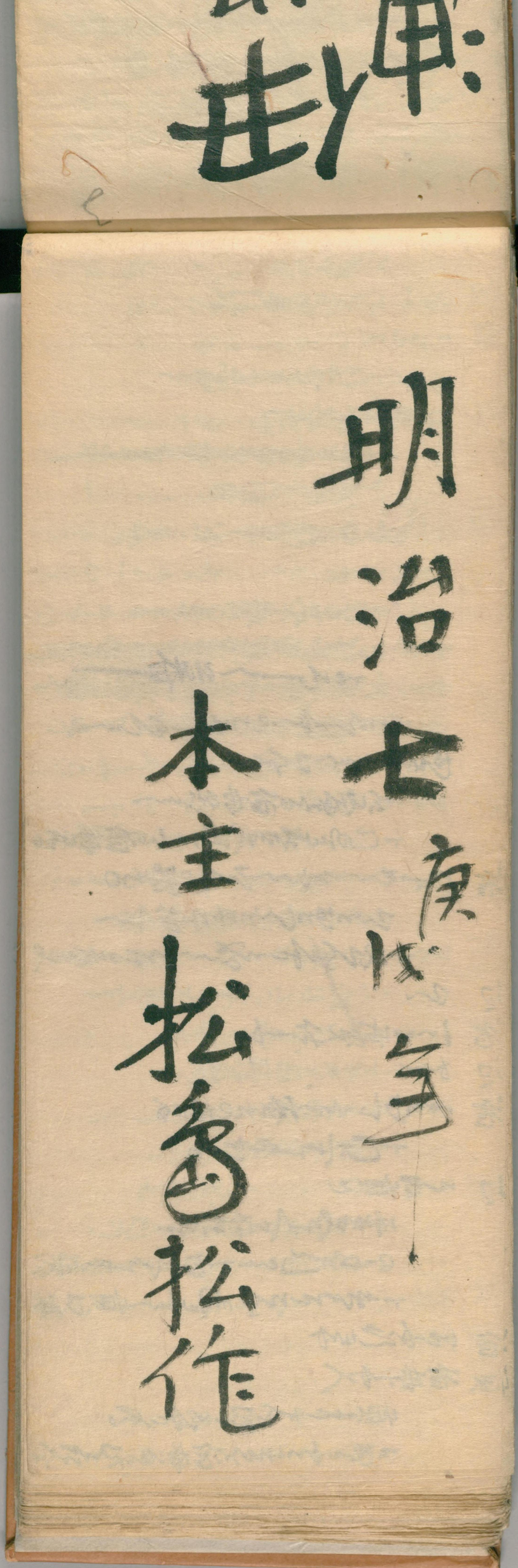
蓮 是ハ百両の金子

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』請求記号 824-2
ガラス使用

伊勢音頭恋寝刃

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　　ガラス使用

思へども岩倉中右門人ちよん其様子阿波
さ伊より仕置るといふだんへの手を遣ひますハ
手伊の此所でこの事をよりなんおろして
思へとも是お家筋へ前ハ本田一筋ゆへ
きつふ有もしや猶又太守公へ上て

去ながら割り込くる折紙と太刀事からの上
済まん法定まれば折角手に入たこの
下坂も折紙なくてハなんの因果で下を折ら
紙ハ正段阿波の岩倉といふ侍が◯こりや
今夜ハ最ハ動れぬぞへ

ト思入此時万野来る

まん　ねじや貢さんが来ていじやく云れじやによし
が折紙を云て居ますの◯

ト太夫月出てりよりふりかへりてまんのをそ

貢　どうへし

コレ貢さんよかつているぞへ

貢　万野此間ハまたそこなぬか

まん　毎晩〳〵あると聞いて噂ハ此間ハ阿波の
お客がこんと存ねバちよつとそれらも揃ひの候て
よふ御国ゑ帰りませぬが貢さんお寺へのぞく

貢　お前の此度もおこんさんハ嫁りませぬぞへ

まん　そんならお岩阿波の客が
アイそれハ其阿波の衆りながお客と連だつて
国元へ帰るそれに立て此所が
こちでもやこんな事

貢　そんならお岩ハまだ〳〵もどらぬか

まん　アイまだそこに居ます　ト思入

貢　今日お岩に合ひに来たものじやが万野ぞ
またよんでくれぬかいな

まん　そりやそなたおかもの御客のある中に候て
どふぞしてよんでくれるれどお客ハ阿波の
お侍さまぢや様子を中〳〵粋とは申すもの
是程もしんせぬか御座てもの姫のまき
紙の合を候いふておりぬる人ぞ

貢　お侍ゆゑか合ぬそれも大事なる方が
ちつと其様子がいたさねば姫くわんのにも
何万野そのうへ一筆の合所そのぶんをと〳〵つうん

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

まん　ハテ伊勢の茶屋で若い者のものを預るは
ありうちそれに預らぬとおつしやるなら
ちもお客に預りませぬ程にそうしておくれ
なさんせ
貢　イヤサちつと去年

まん　サア用がなければ若い者のものを預ります
貢　テモこれは
まん　預ける事が嫌ならおいておくれ
貢　サア
まん　預ります
貢　サア
まん　おいてなさるか
貢　サア
万　サア〳〵
まん　エヽきり〳〵しやんせいな
　ト万野いわれて貢しかたなくの足袋脱ぎ渡す
　男ハ喜助料理人のこしらへにて出る
　里兵衛
喜助　アイヤ〳〵お侍のものハ私がお預り申します
　ト言ふてくる
貢　そちや料理人の喜助
喜　貢様お母様のお家来でござりました喜助でござりますが
よう御存じのお客さまでござります　サア〳〵
お預り申しません　一向お用ひもかなりませぬ
まん　コレ喜助さんそんな事ハどうでもよい　預るのなんの
種　ハテ貢様も今ハ立派なお方の家来
御そなたのえらいお扱ひのおなじ此の侍
人でござります　お預りのこなた世話のこなた
それおさしでなされたらゆるしてくれ
御料理人あれども私も男のすじ
それ〳〵が預りハ私がお預り申しましたら
お客様がそこでかハおてうし申しませぬ
預ふことなりつけるよりハ大事の下拵
貢　唐まゐらせまする私もどうぞ
喜　おつゆとかぶりつき〳〵いたします
　ト刀を渡す
まん　どれ〳〵今で中の茶の間へ置いて来ます程に

浜
貢
浜
貢
浜
貢

さうして取付けるその下緒物を隠さうとする
刀は此度び本国阿波より今日万次郎
様へ殿の此度ともつて来たれを見る

喜　青江下坂の刀じやな。

喜　エヽ振ろすりやアノ此それが

ト頻り岩次紙時分落しへ万野取とり
これを出して見せん

貢　御母上の志まことに貢が身に餘りし下坂の
刀万次郎様へお渡し申す本国へおもむき
給ふても刀の折紙をかへりまするが若殿も
の身に毎夜く此度へ来るのじやと必ず取らう
さいなれど此御心の御用に仕られ
此このたびの折紙を御預け申す所が此

喜　油断なし

貢　其者として志ればこそ、じやと足手ハコレ〇

ト喜助へ囁き

喜　恋やらぬの

貢　そんならば虫の

喜　コレ大事の給金ひろうなし

ト喜助呑込み

喜　それは是非負ふでござりまん

貢　いゝさ何をいふ

喜　サア御受取まで

ト小袖ものを拾ひつゝ橋の唄になり
貢喜助刀とお客へ〆上引ちぎつて
万野喜助お鹿順々に入る

こん　ヤア今の様子あきれるばかり

万　貢さん〳〵まあ下さんせ青江下坂とる
是を預けるといふぬ計りの今夜の書置
此後私が参らぬ内の刀と仕舞込ム

鹿　ほんにまあ給金の足が付しなどやうな

万　ものじや〳〵

こん　那しらせうら夜中ワヽどがぬしさんへ云ふと見え
藤三ろうもかげとかくすここ何にお出でさん
さい国へおとりが一番さへはぶ下坂を
もつていてお渡し申すこふは何じやそ
いゝ

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

どふもお身ひきされぬわたくし。いかさまの
宿へやられるでござりませうにしが姉さまへ
志て下さりませ

　ト秘しさし出し貢へ金包の封印を見て

貢　何がおまへござりまするとお身の上がいふに
　及ぶるその方に状の事さへ思ひもはやまた
　云ひさつしやるな。しかしお前が推量なさるか。いや

廉　其で○

　ト おどろきたる思入にて件の金をかき
　おしいたゞきしつはしを付るが今事
　なかなかせうふもなくばも是の御身が知れぬどお姫
　さまこそ付ついでに是にて其金を出す
　いつぞや此所の姉さまも承知のうへし
　て此金を御身と思ひまして下されい
　思ひ出されて此金を其家も此の所へ遣るを
　よきかなにつけても此の身が思ふやうに其
　ひとへに此金をお受けなされ

貢　其金といふは其ぬし一件こそりや何といふことじや
廉　何ともいとへ貢さん御前も私にいはずとは
　云ふはいなしておくれじやるなれど
貢　何とその
廉　此様な志なれどもいかさまお前の心
　が通ふとおもふてゐるさかい、どうぞ聞て
　下され
貢　いかにのう
廉　アレたつた今此金をおこしてお前を
　云ふてゐる其時は志のお心でこそりや相ひ
　くれじやもしこなさんへ
　　ト貢のひざにすがりて泣く
貢　其さしいふて何とせうの
　　ト寂しき思入あり
喜　サアく早ふ其事のを

貢　おこん
　　ト云ふ所へ奥よりおこんの手をとり
　　喜代おまへさんも様子を聞いて
　　二人の女房仲居など付添ひ貢
　　お供さんへ
[illegible]

くどいわいくどいわいなア

ト貢のひざにすがりつき泣く

貢 そさりあらうのに此女めの

ト突きのけ奥へ行かうとする

岩 サアくく岩次もあるぞ

ト云ふと最前よりおこんの手を引
岩次お鹿と連れ立ちて出て来るもの
二人が身持仲居あしく付きて貢
お拝とらへる

貢 おこん

拝 貢さん待てござるかさうであらう

岩 いやまあそこへござんせ

これらくサア頭を下げてこんく
仲居 アリく

ト云ふと最前より仲居大勢のもの
手を出してまくらへ

貢 そなたハ我身の内に在るを

拝 去れさうかいなア

貢 その内に在るものとせずもどりなと何の

拝 お前有難い事をつくものじや

貢 まどはず知らぬ顔で此方の事

拝 かどじやこれなア

貢 お前が云ふてくれ

拝 此方も今ここお客がござ岩達も付く所

と其ひち母んと申さりとすんでも申ますこの

岩 其お性水やさんものはうんさし岩さん由

とあまりごんさんせ

初 どふしたものいはばあれちやうろや

次 いせぬの事そらするかや

喜多 是ハ申し事この人の女を見て

岩 それいまする所

岩 此者の顔とあるのもおかしいゐる

貢 足

喜 おやしくも此所と此所きつくと第宮

岩 じやとぞをつけまする

岩 行第宮

ト貢の顔をとらへて

歩く〳〵

ト 笑ふ 貢むつとして

貢 コレおこんはお鹿にさやお前が方へ文やつたの
じやろ。ほんにお前は我身の手前も悪いおかげで
ならぬ様な事が出来ました。それが一ツ
つけ込んでいつぞや文を頼んだと相
手を怒らせて一万両と相果ての事
ともいはれ、それではかならずこゝで
お前の事やら、それのかほまた見捨てはせぬ
おまへはいやがらうと何とも返事も振りませぬ
この様な事いはれて、その上に縁のあるに
ほんとに思ふは、お鹿と我が身は何でも彼も
の為にならぬ。わけわかれ我身をみすみす見ても
なうてゐるに、是れを其様に見捨てる程の事
こなたの

鹿 コレ貢さん〇

ト 貢の顔をつくづくと見て
あのおまへはマアあんまりな事。それといふて
わたしが頼みもせぬ事を、言はんでもの事
ほんにまあ、こんな事いふて振られて、やいのやいの
と言ふわいな

ト 振りと見てつかみかゝる

貢 そりや何ぢや、わしをこゝでの事ぢやな
わしが様にお前に、このお鹿さんが心でおかしいぞ
サアこれは何じや、お前の様な女はマア知らぬ
ことの外貢さんのお世話になつてゐやる
さんせぬが一生の人と云ふ事は、いかにもお前
のやうな人ならば、もつと大事な事と思ふ
仕様のないわけもないのがおいとしさに
今さらお前の事をいふたりやわるい
ぞいなあ、是ほどの事がないかいな
むかしのやうな事をいふてお前の

様 いやもう貢さんのお顔つけやうといふてお鹿
さんと其お方の手にかゝつてゐやうもの
さまで人の噂に此やうな縁のあるものか

万 いかに心根を見て、手もなく御無体には言ふ
にやならぬ、このお鹿さまの心の内

貢「のきやと日用すまいでやしまつぷりとせ
仕様のとかつて申しんぐ夜ぞりしとてしる悪
今さら思んごろんとハそりやあなたひきま
ござんせんさまかしんなんでうろ
重ニ万まぜしんでりとおかへ所の

扱「いつ迄こうしての縁ぐわけぢやといふてお磨
さんとはいまも夫婦といはれへよりおたかど
花さんおなしつれだやうに夫婦か
お「いつさ命たまでもおもひきれしいふ
泣「りやみぬからずの身ちもの嘆ハ
だ。「何とていつ迄おかしなぎハ此まヽ置ぬ
呉「り――
ト箸ふお磨むつとしてお扱の侍く
あゝ
磨「お扱さんおまへの関ふい娘能おかしてらん
せしアイこにしぶ頭がみの女さんもおかしう
らふまで何ぶふゑてでてゞもんでう
人参ハ高ひも仕さ身さきれるのもされ
やなとそりや此知て高ひまかのどやなれ
癪でそへし折むらんかんとそりや是れ
ねお前がみうきつ代でお言ふで身もそれ
そりやわしがあるの大事な言事へ是む
のたふりとさがしての脱付のゑんず根のん
ざしとエ両のねりでけ仕つくし前もとく
貢さんお大侍お思まで関をしての振
つれまつア
ト是ですこし貢お磨をてうぶくひさ
よアヽ
貢「ヤレ大分仕めるんせとおひ好根のお吐だ
大事のの体で貢に金をおとつたきて
そんなそりやゑつりし是ふいいあるし
金をおとつた事でそで身ぬめすりその
行とりく
ト女中さいい
磨「うむし様をいやり脹やせてんおまが
おこなんへこ姉とうんせうらへ
貢「いつかんですとく

鹿　今まで此方ゟ手紙の返事ハ遣しませぬ
ト お鹿 懐中より出し
岩　そんなら用がござんすと見へますが 何ぞ 手紙をみせさんせ
これ
手　アイ／＼
ト 状をあける
北　ハテ此手紙ハおれが読んでみよふかナ
ト 此時 お鹿 手紙を見て居ります
鹿　サア／＼読んで下さんせ 今宵ハ皆へ見せましよ○
ト 手紙をひらき
よふござりやす 読みまする 貢さまへ 此間の御状
嬉しく拝見致し候 扨ハ此間より願ひまする
御金の事 もはや是非ともに 金子五拾両ほど
ゆるし遊ばしませ○ 此金子ハ 五拾両 其
金子ハ 急ぎの用と 御貢の事
是も断り申しますハ 何んぞと
ト 此内 貢 お鹿の顔を見る お鹿 顔を
そむけて居る あたりの者 恥しさに顔を
隠し お鹿 手紙の文を 読み上る
なんの事じや
貢　ドレ○
ト 件の文を見て
こりや お鹿 わしが知らぬ事じや
鹿　エ
貢　おまへの名で 書いてある 一件 こりや 何と
知らぬの じや
鹿　此中 お前の 方便に 乗りまして
貢　方便とは
鹿　まだ 何ぞ 方便
岩　方便
皆　アイ／＼

貢　三百両下さんせや○ そちが申すにハ お鹿
が何の事じやと 又金を 其上
もふ おれハ 知らぬ事じや
ト 何気なく お鹿と 貢 顔見合せ
鹿　コレ 百両を とられんどころか 今 此方の

ト万野貢を見て

万　是は何もおれが構ふ事ではござんせぬわいな。わしはなん
　　のまへの言伝がすんだらそれでよいわいな。さア貢さん
　　たつたらどうぞ帰りなされ

ト貢へかぶせて突付る。貢つゝと付て
　　にらみ詰る

貢　女郎をおもちやにする浮気者とは思はねど、貢は礼
　　は言ふ気にもならぬ。万野とても皆つれなふなるは

ト万野を突退けて立上る

鹿　三万野。今の言葉が聞ぬわいなア。お紺さんの心は
　　が、客をだました上で万野に誠のない女郎。そうだんなら
　　というて、たゞ今こちの男めが

万　皆それが承知で阿波の田舎客も喜ばるる鹿
　　と高う出た。金も出しておかしやんした
　　伊勢さん女郎は手管を知らねば、銭金とほしがる
　　ものと思ふても、ちつとそんな女郎もだまし
　　金を受取ると誠らしう言ふが、今はござア
　　三味線の中に、お紺が事に頼まれて
　　とぼけたるが、大事な伊勢音頭の唄と

浪　いつそ事に
　　言はれても男が欲しさに女をだまし、金をとりますア
　　りや、まだ此様なれど今の波の町でござんしや

いゝ　あゝゝゝ

貢　卜第一貢女郎を見て捨て置かれぬ
　　身の上。此女が福岡貢、女をだまし
　　金をとる事ならば、ちよつと此座にある男の
　　了見もつけませう。それでさへ申し聞かせませう

拵　それや見たか

貢　お鹿さんを誠にも思ひ、金も貸して中に立つたお鹿
　　がいやでも、此お鹿さんをばあんまり無理な

拵　まあ申しては万野めが

貢　マア今おれがお鹿さんを見捨てたも

拵　斗かりまでお鹿さんを頼もしう思ふて恋状まで
　　んとも色事の世話

貢　どうしてまあ

拵　サアひいてござんすとも、その中の恋の世話をいたし
　　のゝの

貢　拙

貢　拙

貢　拙

貢　拙

抹 そのやうに結構な武士の女房
になりやしやんせて

貢 ヤ

抹 おらが國へ戻つて侍が女房と見しやんすがつらく
しや侍がきらひきらひでござんせ

貢 侍はきらひかいやい

抹 これにつけてもこんな侍が嫌ひてござんす
ぞ永くの浪人暮し見へますも悲しさ
侍と二世の約束したはそもじを恨しいこのお詞
まあやうに疑ひしやんすでござんせ

貢 そんなら神かけてみせてくれるといふぞや今の疑ひ
侍がいやゆゑかいな

抹 サアそればかりでもお前は御師職付なれど
これほどに何とぞ女がいかにせよ御師を止さし
町家の住居町人と女夫になればこそその
お詞もうらみなりとし侍はきらひ町人が
よいわいな

貢 大振舞ともいうべいたもと御事あるまいが
いてうりや物も言はず思案家にならうといふまいぞ
そふなれは世なし世帯をかまへるでない那やな

抹 うそじややらじやないが侍と町人とは
さうじや今迄に堅気なまかやんせうぞも
なるかいなまた侍に町人にならうかへなんと

貢 お前と一所になれはまゐらしてよ

抹 なんの貢さんがおいやならいかにもお前ござろ
まあ暇取て出世やるなら御師をやめし森
たわけ出せば出世を待てござる

ト

貢 ナルほどに貢が侍がきらひなら拙者も町人と
嫁にいひじやといひ合ふとしても今といひより所為
そち侍を二世まて思ひ切つたといふ

トおもひ入

抹 そんなら嬉しうござりまするござんすぞへ

貢 第一は又此所へ清左衛門

ト抹の方へ行てまんざらとあく

ぢまん

コレ大事のお客のおそれ候ふ捨ても
もし此事を言ふなら

ト

貢 「まだいふ事が有がきさんすか。お前も聞へた
蝶ぶひじやいやる事。今といふ今お前を
しく存て居ましたわいなア

ト ぶつとる

拝 「そんなら了簡して下さりましたか。忝ふござんす

貢 「是へ及ばぬ。清書して仕舞ふ

ト お拝の方へ行てまん中をゐる

まん 「コレ大事のお客様のことぢやぞへ。何でもかでも
もふ此中でまんおまへの様子しらぬものは言さハ
せぬさかいに、どふぞもふ了簡しなんせいな

貢 「こゝはどふでもよい。是非とも宿へハ去なぬ
宮への所を置て帰る者をよこせ

ト此時喜助が貢の刀をお紺へ渡す

喜 「イヤ喜助が預りまして居る此刀ぢやによつて
おまへ様の御帰りまで

ト此の間しかちの刀を渡す。貢見てござんせ

紺くいれし

まん 「そんならお前きつとゐなんすか。わたしの
是貢さん、ちよつとたのみます。さあさあ

ト是にて刀を振り払ひ行かうとする

拝 「是も貢さん
や

貢 「是は是ぢや。何じやいなア

拝 ゐ

ト内証ではなはだしいとお紺と貢
肝煎いふをしも振り返るを見て嘆
此貢是を見て了見の悪い方
話をするのを見て我を見るのも

まん 「お前さんの了簡なさるものならばどふぞ
早ふウトとさゝれて承知さるさるの
どふぞ貢のお前へ何事か言ふてんま
りやよいが

紺 「そこをまあおまへがそれほどに申ましても
是はまあ何故ぞいなア。此刀は
切られまいぞ

仲居
二三人 「ハイしま…

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

拝 女房が何じややかましい

アイ田町人の娘じや申せども女房の娘

[illegible]

岩 去りとてそれはやかましい

拝 何じやぞ

ト是にて顔見合て三人顔見合せ

北 北六が付ているさかい満足でござんせう

岩 岩次殿にお二人が見の印を嘘をついては二百や

北 役の後をおふくさればお好きでお前

此町人の娘が女房と娘といふ事は嘘じやお

其ぶんでござりますが合点の通りよく

岩 岩次が好き顔を申さぬかしらし

此川隠居の手へ国へ帰り藤屋を申して

[illegible]もちと見る様にかなよふにして

り形を上申

北 身づれは其女が借金の大分を成さ済

其の顔ずれ此のちからけりて[illegible]

岩 早ふ手離出り申す

北 コレお拝こちらが宣の通り中六は町人

頃 藤屋の女房とお拝といきなりと

そう[illegible]

北 北の事

万人 北の事ものめ

ト顔中と[illegible]お拝見て

拝 [illegible]ろくでもない[illegible]

申藤屋の北六さんとは[illegible]申にちかいや

其れく

ト岩次見て

北 されば藤屋は北六こそ町人の娘

藤屋へ[illegible]

其[illegible]河原の[illegible]岩次殿を

拝 いや北六

岩 強おの町人藤屋北六じや

其北六さんが何の為に[illegible]申しかねん

拝 去ればじや

北 されば是ずんと関係の[illegible]

此藤屋北六が岩次殿と[illegible]

国立国会図書館 タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

貢　これやこれ〇

トかけゐる御拝陰をぴつたりと切りのける

貢　此飛も折紙を腰にて

やうやう落道の御家がわたる家の折紙

ござい〇

ト折紙を懐中しく書の状とひらき

人目あらばせ此身へ退状と衛り得に来りそ

ゆゑお家のおん腰つぶと伝へる様子中とこと上

金と存じ白しますかくしてゆうにさらく

おかれ申様の三年まへに私がよう女を

らく此事は万世御家が列座の家来

の様子をもつて中にはらさずに候

河原の宮にて私中九分を先づしくと

に家中むくろの雑とみ類の云ぬ

報じく申しを先づつとて様をこらせ

国への仕とりとくるまでに云ふ

指をもつて此のをお腰へつのの今より

御家に待ちやり中と証拠をつかみ様と

切りや根てあたりをと河原の家も家と

書しまでいつのやうやう中にて自身のかなり元

られ敵折紙をとらへてし渡しまし

まれてあかるまつ法様岩根とけ候ハ

中ゑ職に在る所の〜ヶ中ハ

いかが法ー岩根となり中ゑ此国への

御家に此の出しもの出町へと仕と金銀

その子に持ちし気と運を知るまいか

在るまいかいかつるいかなもの

あるらまじく此の根が戻りし国の

ト〇此これやまつくをかすると

出でし新くとて所まつは折紙を見

通まちまつりりま是みのぢしやるコレ

お捧てよそん新ぎた根へ〜ござり

なさる腰だに折紙に金子をそれえ

金の橋をそたしやれ御の中にて之

この外の刀と渡しおつとまも大事のの

めが信じてこのさまは何か

トみなたくしかし金子より万地

わたしがにくい此折紙とりて国[illegible]
ト〔[illegible]〕みりや　せめておかうとおもふてを
此おきこへて[illegible]が折紙を見
返さまいと思ふて　わざと万野がふりて[illegible]コレ
お国へ[illegible]　貢さん[illegible]

それなら此じやによつて折紙ばかり手に入たれど
金が様子はまだ此刀の中しかと知れぬゆへ付
見たる外の刀を渡しおつたら是も大事万野
めが仕た事でござるぞへ　忝い
ト万野がほうりだしたる刀のふたより万野
表あわてゝ無言に成り
まん　ヤ此刀を
ト貢の刀へ手をかけるとゆかれ[illegible]
貢　万野此刀の一腰を何とぞ見せて其方へ渡
しておかれぬか　此刀を返してくれ
まん　おいてもサア貢さん其方の刀は首尾が叶ひよ
ト　やらぬと万野がうけとめて[illegible]
刀はお客の刀で有まいとも[illegible]
貢　そんなら刀をすて[illegible]おのれ
まん　ワーやまんやなつて此
貢　[illegible]のぶ[illegible]おのれまりく
扨おのれ
ト[illegible]刀で万野を斬付ける
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
喜　ヤ貢さん[illegible]
ト[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぜりふになりあるひ貢ハ雑魚一疋取りかゝる
見らんだ名刀を手ト乃の頭へあたり仕掛
面をさぶりと切りその倒れる
女房ハ男をアレ人殺しと貢刀を振
上げ飛びかゝるをつかけるとよき女房
ころしまるまへ逃るを仕とまる様子
また刀の先女房ハ当り倒れる貢階子
の口より太市さんおくり段の
下ハ付見ゑ紛ひ階をさる切て貢の
下りるを渋り寄り振かざし紛ゑる階子
の段へ逃る貢ハ及びでした切る仕出
おゐ仕掛けに胴切ハ成る貢ハこれ
二階へ上り降りて下る間に小あ庭巻
と来り庭て扨し貢をたてゝ

岩 やア貢ら

貢 小六ら

ト小六郎ハ上ると貢ハ首をとらる
仕掛かる首の手狸へ首切る貢を
こわがりと見て治るる太伝手のこる
道具かわる

舞台一めん金ね狸付てるしまの二階向ふ掃除揃子
扉中の伴殺なし顔を播揃座敷一面より
あそび座敷の掃除をなしを担当油屋表二階の手ん
程時かの事し　道具留る

ト兎角太夫の時鳴るヲクリ中にも伴ゑ
太夫ひ中げおくしてもまゑ入ゑ奥より
岩次逃るゝおる貢逃るみおくして出る
ゐこし岩次を切倒して成り人の頭へ
おくへ報ゝと声がするこゑかゝきり
倒れるとまる右手その身びの逃るゝのが
茂みからお庭おゝし

廉 や貢さん

ト逃るを上る貢ハ出梯子風
とやなりこなし下りてくるお廉の首を切る
乗のお廉おくり扨り貢の様子をなし
るの間に貢ハ縄ヘかけて
こちゃしお廉あゝ逃るとる切

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2　ガラス使用

明治七甲戌歳

本主　松嶌松作

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』請求記号 824-2
ガラス使用

824
52
2

国立国会図書館　　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢音頭恋寝刃』 請求記号 824-2

ガラス使用